

「中心と周縁」はあるのか? —イスラームの「周縁」をめぐる映像上映会報告記—

一〇一〇年二月二三日と三月七日に、みんぱくで「映像に見るイスラームの『周縁』」と題する若手研究者の映像上映会が開催された。イスラームといえば中東、というイメージをわたしたちは既に構築してしまっていると思われるが、一五億人ともいわれる世界のムスリム人口の半数以上は中東以外のアジア、アフリカなどに暮らしており、また、中東にはムスリム以外の人びとも暮らしている。まずはそうした事実を、それぞの研究者がフィールドで撮影した映像を通して知ろうというのがこの上映会の目的のひとつであった。

●さまざまなムスリム、

イスラーム世界のキリスト教者

今回上映された映像は六作品。バングラデシュにおける割礼の変容を扱った作品(南出和余)をはじめ、中国・回族の葬送儀礼(今中崇文)、ベトナム・チャム族のラマダン(筆者)、トルコ・アレヴィーの儀礼ジエム(米山知子)など、儀礼やそれに参加する人びとに焦点を当てた作品が四本、さらに、インドネシア・西スマトラの伝統的身体技法について扱った作品

(村尾静二)、イスラエルのアラブ人キリスト教女性のライフヒストリーを描き出した作品(菅瀬聰子)もあった。いずれも二〇分程度の短編である。

テーマや地域は多岐にわたってい

るが、どの作品もイスラーム世界のマイノリティ(アレヴィー、アラブ人キリスト教徒)や、中東を「中心」とした場合の地理的な「周縁」(バングラデシュ、中国、ベトナム、インドネシア)で生きるムスリムを対象としている。中東に暮らしたことのないわたしはこれらの映像に映し出された対象の「周縁性」に驚かされたことはなかったが、その多様性は実感させられた。例えばコーランの読み方がそのひとつ。いわゆる一般的といわれるコーランの朗誦の仕方があるかと思えば、中国の回族が葬送儀礼の際に読み上げる京劇の歌のような節をつけた朗誦や、まるで仏教の僧侶が唱える念仏のようないベトナムのチャム族の朗誦もある。

●「中心」を揺さぶる

—映像というツールの可能性
「周縁」に着目することでそれぞれがもつ「イスラーム」の、あるいは

は「イスラーム世界」のイメージが揺さぶられる。会場からはこうした意見も聞かれた。また上映会の後におこなわれたディスカッションでは、はたしてイスラームに「中心と周縁」という設定は成り立つか、という問題が提起された。確かに作品の制作者はそれが「周縁」であることを意識しながら撮影していたわけでもないだろうし、登場する人びとも自らを周縁に位置づけているわけではないはずである。

そもそも、こうした議論が可能になるのは、映像というツールによって視覚的に対象がイメージされるからであろう。音、衣装、動作などを伴う儀礼や踊りを伝えるには、活字媒体よりも映像の方がはるかに説得力がある。イスラームという字面から各々が想像するイメージと視覚的に映し出されるイメージがあまりにも異なっていることに驚愕するという体験は、映像という媒体を用いてこそ実現できるものだろう。こうした議論を通して、映像というツールがもつ可能性を改めて感じた上映会であった。



作品の解説をする村尾静二氏



吉本 康子
よしもと やすこ
民博 外来研究員
専門は文化人類学。おもにペトナムでフィールドワークをおこない、村落の宗教や民間信仰について研究してきた。最近はマコンテルタ周辺におけるイスラーム化の展開について関心をもち、調査を進めている。

各作品の撮影場所